# さくら湯再生に機運上昇

## 熊本県・山鹿温泉のまちづくり

## 歴史、文化の観光資源を生かす

熊本県山鹿市の山鹿温泉は、県内でも最も歴史のある温泉地の一つで、夏の夜を彩る山鹿灯籠まつりなどで知られる。魅力はそれだけではない。明治時代に建てられた芝居小屋「八千代座」や豊前街道の宿場町の町並みを生かした観光プログラムが充実。共同浴場「さくら湯」も再建され、昨年11月に江戸・明治時代の建築様式を再現した新施設としてオープンした。住民の間に歴史や文化に根差した地域振興への機運が高まっており、豊富な観光資源を生かせば、さらにブランド力のある観光地域に発展する可能性を秘めている。山鹿温泉のまちづくりをリポートする。

### 課題は誘客PR不足 営業態勢の強化必要

「八千代座を再生したことで、みんなが気付いた。山鹿の歴史や文化のすばらしさに。昔は、地域の旦那衆が力を合わせて八千代座を建てた。今の商店主の多くは言ってみれば、その旦那衆の末裔。今の旦那衆は何をすべきか」。山鹿温泉観光協会の会長で、こうじ製品の専門店「木屋本店」社長の井口圭祐氏はそう語る。

八千代座は、1910（明治43）年、山鹿の実業家たちが建設した芝居小屋で、山鹿温泉の中心市街地に位置し、歌舞伎をはじめ芸能などが盛んに上演された。昭和40年代には経営不振で閉鎖、利用されない状態が続くが、再興への機運が高まり、1989年に活用を再開。数次の修復工事を経て、2001年に「二度目のこけら落とし公演」として片岡仁左衛門一行の大歌舞伎が行われた。以降、歌舞伎などの公演でにぎわうほか、公演日以外の施設見学にも多くの観光客が詰めかける。

地域の歴史や文化が再認識されるNHKの朝のドラマ「オードリー」のロケ地に山鹿が選ばれた。中心市街地の昔ながらの町並みが昭和

井口圭祐氏

平井英智氏

でおもしろいと評判を呼んだ。

「ガイドと言ってもみんな素人。チャレンジではあったが、お客さんを喜ばすことを第一に考えた。そこに徹すると商品の販売にもつながる。観光協会が受け付けに協力してくれたり、旅館の営業マンが売り込んでくれたりしたことも成功の要因」と井口氏は語る。

米米惣門ツアーの成功とともに、山鹿市が電線の地中化工事など豊前街道沿いの中心市街地を整備。歴史まちづくり法に基づく歴史的風致維持向上計画も策定し、2009年3月に九州で初めて国の認定を受けた。歴史や文化を生かしたハード、ソフトのまちづくりが進む中で、さくら湯の再生にも乗り出した。

さくら湯は、山鹿温泉の中心にある元湯。その歴史は肥後細川藩・初代藩主の細川忠利の休憩所として始まる。明治期には市民温泉に生まれ変わり、道後温泉本館（松山市）を手がけた棟梁、坂本又八郎により唐破風玄関を備える大改修も行われた。しかし、時代の変遷とともに、1975年には

八千代座　1910（明治43）年に建てられた芝居小屋。江戸期の様式の中にドイツ製のレールを用いた廻り舞台を備える。歌舞伎や市民の芸能などに利用されている。国の重要文化財。資料館を備え、公演日以外は一般に公開しており、ガイドが舞台やならくを案内してくれる

再開発ビル内の施設として営業する形態に変わっていった。かつての姿を取り戻そうと、市が約10億円をかけて再建事業に着手。明治・江戸期の建築様式を再現して外観、内観を整備した。昨年11月にオープン。住民や観光客に利用され、八千代座と並ぶ山鹿温泉のシンボルとしてよみがえった。

山鹿市全体の宿泊、日帰りを合わせた観光入込客数は、2012年が382万人（宿泊31万2千人、日帰り350万8千人）。3年連続で増加傾向にある。8月の山鹿灯籠まつりも毎年、2日間で数十万人を集める。市内はスポーツ施設も充実しており、競技大会や合宿などのスポーツコンベンションも盛んになっている。

ただし課題もある。「観光資源の磨き上げは終わったが、セールスは不十分。もっとPRが必要だ。今は人が来ているが、この先は大丈夫なのか。客数などに具体的な目標を掲げ、地域を挙げて計画的に誘客を進める営業活動が欠かせない」。山鹿温泉観光協会の青年部長で、老舗旅館、清流荘専務の平井英智氏はそう指摘する。

山鹿温泉の主な集客エリアは、11年に八千代座の100周年事業、11年に九州新幹線の全線開業、12年にさくら湯のオープン。これらの効果が表れた。ただ、誘客宣伝や受け入れ態勢整備は引き続き課題だ。山鹿灯籠まつりなどのイベントを含め、中心市街地、周辺地域にある観光資源を生かす事業を強化していく。

――観光資源は確かに豊富だが、山鹿市の知名度は全国的に高いとは言えない。

池田　山鹿市が全国的なマスコミに取り上げられる機会も増えている。山鹿温泉に加え、平山温泉などの人気も高まっている。ただ、福岡都市圏、熊本都市圏などの中心的なターゲットを除けば、全国的な情報発信は確かに課題で、効果的なPR戦略を組み立てる必要がある。同時に、地元の魅力を十分に理解し、それを発信していくような人づくりも欠かせない。

――観光に関する山鹿市の数値目標は。

池田　山鹿市総合計画の中では、2015年の成果指標として年間観光入込客総数を337万1千人に、年間宿泊客総数を34万3千人に設定している。入込客の方はすでに指標を上回っている。来年度が計画の見直し時期にあたるので、そうした動きを応援していく。

――今後の市の観光事業のイメージは。

池田　さくら湯を観光情報の発信拠点としても活用し、中心市街地だけでなく、周辺地域にも旅行者が回遊するように仕掛けたい。回遊の課題でもある2次交通の整備は、タクシー事業者などと連携して対応したい。また、山鹿市は、競技大会や合宿などのスポーツコンベンション、八千代座などでの文化事業も盛ん。行政としても、観光、スポーツ、文化、それぞれの施策を連携させて地域の活性化に成果を上げたい。

――山鹿市への送客を検討する旅行会社などへの働きかけは。

池田　豊富な観光資源、体験メニューを紹介していきたい。市単独だけでなく、菊池川流域、熊本県北部の自治体と連携した広域でのPRも進めている。観光素材を旅行商品に組み込んでもらえるように提案を強化していきたい。

### 米米惣門ツアー 観光メニューに定着

米米惣門ツアーは、山鹿市の中心市街地を舞台とするユニークなプログラムだ。酒蔵や味噌蔵、せんべい屋など〝米〟にまつわる老舗の商店を巡る。ガイドはそれぞれの店舗の店主や従業員が務めている。ツアーは2000年にスタートし、山鹿温泉の観光に定着している。

――福岡都市圏、熊本都市圏が中心で、広くみても九州エリアから広島・愛媛エリアまでと言われる。山鹿市の観光基本計画（2010年3月策定）に収録された都市圏住民を対象にした調査では、「山鹿市を知らない」という回答は関西圏で74・7％にも上った。2011年3月の九州新幹線全線開業で関西圏からの旅行者が増えつつあり、認知度は上昇しているとみられる。しかし、首都圏などを含めて全国的な認知度を向上させる余地は残っている。

「地域資源に恵まれ、米米惣門ツアーだけでなく、八千代座や山鹿灯籠民芸館などを案内するガイドの質も自慢できる。誘客の推進態勢を整え、旅行会社にも売り込みたい。経済波及効果、雇用創出効果を考えれば、誘客に予算、人員を投じるだけの価値はある」と平井氏は語る。

地域の歴史、文化などに対する地域住民の愛着、誇りに根差したまちづくりに理解が深まる一方で、地域間競争でもある誘客にいかに取り組むか。地域と流通を結ぶ誘客セールスの仕組みづくり、さまざまなツールを生かした情報発信の工夫などがこれからの課題となりそうだ。山鹿温泉の観光まちづくりは、新たな段階に入っている。

豊前街道の宿場町の風情がただよう山鹿の中心市街地

### 周遊観光の促進もテーマ

#### 山鹿温泉以外にも 有力な資源が点在

山鹿市は、2005年1月に山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町が合併して誕生した。人口は約5万7千人。山鹿温泉がある中心市街地以外にも豊富な観光資源がある。温泉、渓谷、棚田、古墳、道の駅など多様な魅力があり、周遊観光の促進が期待される。

温泉は山鹿温泉のほか、平山温泉、菊鹿温泉などがある。なかでも平山温泉は山と田園に囲まれたのどかな温泉郷で、近年人気が高まっている。

山鹿市を流れる菊池川の流域は古くから良質の米の産地。収穫された米は川船を利用して運ばれ、集散地である山鹿は栄えた。その名残で豊前街道沿いには今でも米に関係する商材を扱う商店が軒を連ねている。

ツアーの主催は、各商店でつくる下町惣門会。米米惣門ツアーで巡る店舗は、江戸天保年間（1830年ごろ）の創業で味噌などこうじ製品の専門店の木屋本店をはじめ、せんべいを焼く体験ができるせんべい工房、試飲ができる酒造り史料館など。

通りの全長200㍍の間に店舗が集中しており、所要時間は約1時間。ガイドは、店舗ごとに店主や従業員が行い、次の店舗に案内するリレー方式。ガイドらはユーモアを交えた語り口など参加者を喜ばせる案内技術の向上にも努めている。

参加料は土産が付いて1人500円。団体客にも対応している。予約は前日まで受け付け。申し込み先は山鹿温泉観光協会となっている。

### 農業との複合化を推進 観光回遊性も高めたい

#### 山鹿市の副市長 池田 永実氏に聞く

――市政における観光施策の位置づけは。

池田　市長（中嶋憲正市長）は、重点施策として「人をつくる・人を育てる」「経済をつくる・活性化する」「人口減少に歯止めをかける・定住促進を図る」の3本柱を掲げている。特に、経済をつくる・活性化するに関しては観光振興を重視している。

これから地方都市は急速な高齢化、過疎化、人口減少社会を迎える。地域社会を維持していくには、地域の主体性がますます大切になる。外からの動きに期待するのではなく、内側からの盛り上がりが必要。そこで観光が重要になる。住民が地域の文化を再認識し、その良さを誇れるようにする。そうした住民のエネルギーが観光振興、まちづくりに生きてくる。

観光施策の方向性としては、これまでに整備を進めてきた八千代座、さくら湯、豊前街道の歴史的な町並みなど、中心市街地に集積した観光資源を生かす。さらに周辺地域には豊かな自然環境が広がり、優れた農産物が生産されている。中心市街地と周辺地域の連携、または観光と農業の複合化を推進したい。観光客誘致、6次産業化などに結び付く住民の取り組みを支援している。

――観光振興の課題は。

池田　観光入込客数は減少傾向にあったが、2010年から増加傾向に転じた。10、11年に八千代座の100周年事業、11年に九州新幹線の全線開業、12年にさくら湯のオープン。これらの効果が表れた。ただ、誘客宣伝や受け入れ態勢整備は引き続き課題だ。山鹿灯籠まつりなどのイベントを含め、中心市街地、周辺地域にある観光資源を生かす事業を強化していく。

――観光資源は確かに豊富だが、山鹿市の知名度は全国的に高いとは言えない。

池田　山鹿市が全国的なマスコミに取り上げられる機会も増えている。山鹿温泉に加え、平山温泉などの人気も高まっている。ただ、福岡都市圏、熊本都市圏などの中心的なターゲットを除けば、全国的な情報発信は確かに課題で、効果的なPR戦略を組み立てる必要がある。同時に、地元の魅力を十分に理解し、それを発信していくような人づくりも欠かせない。

――観光に関する山鹿市の数値目標は。

池田　山鹿市総合計画の中では、2015年の成果指標として年間観光入込客総数を337万1千人に、年間宿泊客総数を34万3千人に設定している。入込客の方はすでに指標を上回っている。来年度が計画の見直し時期にあたるので、そうした動きを応援していく。

――今後の市の観光事業のイメージは。

池田　さくら湯を観光情報の発信拠点としても活用し、中心市街地だけでなく、周辺地域にも旅行者が回遊するように仕掛けたい。回遊の課題でもある2次交通の整備は、タクシー事業者などと連携して対応したい。また、山鹿市は、競技大会や合宿などのスポーツコンベンション、八千代座などでの文化事業も盛ん。行政としても、観光、スポーツ、文化、それぞれの施策を連携させて地域の活性化に成果を上げたい。

――山鹿市への送客を検討する旅行会社などへの働きかけは。

池田　豊富な観光資源、体験メニューを紹介していきたい。市単独だけでなく、菊池川流域、熊本県北部の自治体と連携した広域でのPRも進めている。観光素材を旅行商品に組み込んでもらえるように提案を強化していきたい。

### 山鹿温泉の人気イベント

山鹿灯籠まつり　毎年8月15、16日に行われる。圧巻は、頭上に山鹿灯籠をのせた女性たちが優雅に舞う「千人灯籠踊り」

山鹿灯籠浪漫・百華百彩　2月の毎週金・土曜に開催。風情ある町並みを竹と和傘の灯りが幻想的に彩る